

大衆の嗜好も考察

関西モダニズム検証

大正、昭和初期に花開いた特色ある文化を検証する『関西モダニズム再考』（竹村民郎、鈴木貞美編、思文閣出版、8925円）が刊行された。文学、美術、建築から漫画やカフェ文化まで、大衆の嗜好にも目を配ったユニークな研究書だ。

大阪―神戸間の鉄道沿線に富裕な市民層が住み、文化水準の高い生活を送っていたことから「阪神間モダニズム」という言葉が生まれた。それをさらに京都や奈良に拡大した国際日本文化研究センター（京都市）のスタッフらの研究活動から、今回の出版が実現した。

「関西では商売は金もうけだけではない。利益を社会に還元して文化



を生み出す伝統があった。東京中心主義で関西が自信を失っているが、文化を掘り下げて活性化させたかった」と編者の竹村。

鈴木は、モダニズムと近代という大きなテーマを問い直した。「阪神間に京都と奈良を加えると、江戸ができる前の都市文化、歴史的な目を持った場所となる。そこは昭和まで、東京の銀座をしのぐモダンな街だった」と話す。

また、中河督裕・大阪薫英女子短期大学教授が「梶井基次郎『檸檬』に見る大正末・モダン京都」のテーマで、寺町や新京極の近代性に触れている。五十殿利治・筑波大学教授は新興芸術運動「マヴォ」の関西での活動を論じる。（生田誠）